

上郡町の偉人

大鳥圭介

第三十五回「鵬程万里」中川由香

二人の「おおとりけいすけ」を結びつけた生き方

「おおとりけいすけ」という名前から「ポテチン」などの持ちネタや京歌子との夫婦漫才で一世を風靡した昭和・平成初期のコメディアン、鳳啓助を思い浮かべる方は少なくありません。鳳啓助は、本名小田啓三。一九九四年に七十一歳で没しました。鳳啓助は多芸で、俳優、脚本家でもありました。その芸名の由来は、大鳥圭介です。また、鳳啓助の脚本家としてのペンネームも「志織慶太」であり、大鳥圭介の幼名慶太郎と、偶然か、名前が似ています。

鳳啓助は、祖父が劇団を結成しており、三歳よりその劇団の子役で出演していました。小田啓三少年は旅回りの二座で育ちながら苦勞し、皿洗いや新聞配達で暮らしを支えました。舞台上上がることができようになり、自分の芸名を真剣に考えた際、大鳥圭介の生き方が好きだと、その名をいただいたとの事です。

「大鳥圭介はやるだけのことは十分したから降参してもいい、死ぬことはない」といって、維新政府でも要職につきました。あの生き方がすきなんです。ぼくはいつまでもみんなと生きていたい」と、鳳啓助が圭介の生命力の強さに感動したと述べた記事が、昭和四十五年の読売新聞に掲載されています。

鳳啓助は、二十三歳の際に自身の鳳啓助劇団を結成しました。まず装置を考え、役者の割り振りを考え、役者達が喜ぶ芝居を考え、最後に物語を組み立てました。肩の凝らない芝居で、出演した劇団の役者には必ず皆に見せ場があり、誰もが喜んだとのこと。

鳳啓助と大鳥圭介には共通点があります。圭介も芝居が好きで、適塾時代には朝寝する塾生を芝居の物まねで起こし、周囲を笑わせました。

また、圭介の著作や書画には独特の面白みがあります。戊辰戦争の

軍記「南柯紀行」は悲惨な状況を書き連ねていますが、同時に酷い体験を客体化させて笑いを誘います。

圭介は漫才師としての才能も覗かせます。さらに、圭介は戦で負けても莞爾として笑い、おもむろに今後のことを談じて、敗戦に沈む周囲の士気を回復させました。二人の「けいすけ」は、周囲を楽しませ和ませ、人々を元氣付け英気を養わせる、温かい人柄の人物でした。二人は共に人生で切磋琢磨を重ねた苦勞人で、プライドに拘らず、名前より実で、自分より周囲の心情を慮り、ユーモアがあり、謙虚で聡明であるという共通点があります。

さて、鳳啓助は圭介の、負けても死なずに生き残り後の世に尽くした生き方が好きということでした。「やることは十分したから、降参してもいい、死ぬことはない」との考えにポテチンと参ってしまった」と鳳啓助は述べます。一方、五稜郭で降伏において圭介が「ここはひとつ降伏と洒落込もう」と述べた逸話が有名ですが、この言葉は圭介や当事者の記録にはありません。これが触れた最初の書物は明治四十二年の「明治偉人百話」ですが、これは幕末明治の英雄の噂話を集めたもの

で信憑性に疑問が残ります。同書はこの言葉は圭介ではなく副総裁の松平太郎であるとも記します。

圭介の発言として「既に志を成すことは不可能な戦況であり、これ以上いたずらに壯士を殺すのは極めて無用で不仁の挙である」「誰も城を枕に討死にする外はない、降伏者として一生を終わるのは最後を汚す不忠不義の者だと主張している。しかし敵は朝廷ではない。もし薩長に降伏するなら断じて不可だが、朝廷の大命に随うとするならば、降伏ではなくむしろ臣民として当然のことだ」と、皆の意見を降伏にまとめた理路整然とした言葉が「帝国将校列伝」「死生の境」などに記されています。鳳啓助が感じ入った、自分と周囲を生かし生き抜いた生き方は、逸話より本人の言葉で、さらに強調されています。

鳳啓助はがんで逝去する直前、「蛍の光」を歌っていました。蛍の光で本を読み、月光を反射する雪の明かりで勉強し、報われて大成した故事に、芸人として成功するまでの長い下積みの苦勞を思ったのかもしれない。圭介の辞世の言葉「骨が折れる」と共に、人生で踏みしめた、陰しく密度の濃い道程を思わせます。